

1: 【The Black Note】第10話 封じられた未来  
2:  
3: ■オープニング  
4:  
5: セレスモノローグ「後の世に、闇の書・ブラックノートと呼ばれた書物がある。それは、12の精  
6: 霊核の伝説の裏に隠された歴史を書き記した漆黒の表紙の書物だった。決して歴史の表に晒  
7: されることのなかった哀しくて、切なくて、心がおしつぶされてしまいそうなほどの真相。  
8: でも、それは飾られた偽りではなく、紛れもない真実——」  
9:  
10: ■タイトルコール  
11: デュレ「The Black Note 第10話 封じられた未来」  
12:  
13: ■本編。  
14: □場面、久須那 対 マリス。  
15: SE：剣がふるわれる音。  
16: SE：フォワードスペルの実行音  
17:  
18: マリス「死ねえっ！」  
19: ゼフィ「あああああああっ！」  
20: マリス「何？」  
21: 久須那「ゼフィ！ 何故、お前がここにいる！」  
22: マリス「……お前、何のつもりだ。命を張って久須那を守ってどうするつもりだ」  
23:  
24: SE：ぼちゃん。  
25:  
26: ゼフィ「判りきったことです……。わたしと……同じ立場なら、あなたも同じ事をするでしょ  
27: う……」  
28: マリス「フン、偽善者め。わたしが聞きたいのはそんな見え透いた麗句ではない」  
29: シリア「——ゼフィ？ ゼフィっ」  
30:  
31: SE：近づく足音。  
32:  
33: シリア「ゼフィっ！ 何があったの？」  
34: レルシア「ゼフィ……！ 今——」  
35: ゼフィ「来ないでください！ はははあ……。どうしたかったのか……聞きたいですか……？ サ  
36: スケっ！」  
37: マリス「くそお」  
38: サスケ「……マリス、年貢の納め時だ。大人しく封印される——。ゼフィっ！」  
39: サスケ・ゼフィ「雪原を駆け抜ける凍てつく北風を氷雪のふるさとより揺り起こし、我が、望むる  
40: 場所まで送り出せ。氷雪の女神・クリスタロスの氷の接吻、祝福をその身に受けよ。フロ  
41: ズンピンディング、ダブルバインド」  
42: マリス「うああ。……またか。性懲りもなく二度も同じ手を」  
43: サスケ「いいや、違うさ、久須那。来いっ！ これで最後だ！」  
44: 久須那「判った——」  
45:  
46: SE：矢をつがえ、放つ音。

47:  
48: 久須那「マリス、もっと判り合うだけの時間が欲しかったよ……」  
49: マリス「くそおお！ 放せ、放せえ」  
50:  
51: SE：矢が飛んで、刺さる。  
52:  
53: マリス「ああっ！」  
54: サスケ「氷雪の王者、サスケの名において命ずる。星霜の彼方より続きし精霊王の死せる魂を呼び  
55: 覚まし、血族に受け継がれる白き魔力を解き放て。さすれば、氷の風格を閉ざされし記憶の  
56: 淵から呼び覚ません！ お前とは長いつきあいになりそうだな……？」  
57: 迷夢「光に住まう闇の言霊。迷夢の名において我が望み……天使の世界と現世（うつしよ）を分か  
58: つ次元の壁、境界領域を修復、強化……。そして、何人の触れることなきよう封鎖せよ。願  
59: わくば……願わくば、再び、天使の世界への扉が開くことのないように……。キャ……キャ  
60: リーアウト……」  
61:  
62: SE：魔法発動。  
63:  
64: 言霊「……千年だ。その時が来たら、再び、我を呼べ……」  
65: サスケ「封魔結界っ！」  
66: マリス「貴様……わたしが悪魔だというのか」  
67: サスケ「そうだ。周囲に仇なすものを"魔"と言わずに何という。お前は悪魔より悪魔的な天使だ  
68: よ。かつて、天使の住む世界で災厄を呼ぶものの名を恣にしたことはある。迷夢の策士と双  
69: 璧をなしたとも聞き及んでいるぞ……」  
70: マリス「お前などに大人しく封印されるとでも思ってるのか。わたしはこんなところで」  
71:  
72: SE：ピキピキと凍りつく音。  
73:  
74: マリス「サスケ！ お前はここで死ね」  
75: サスケ「ぐあ。遅い……。ここまで来たら、オレを殺したところで、お前は封じられる」  
76: マリス「構うものか。封印はいづれ解ける。なら、続きはそのときにやるさ。今はお前を永遠に抹  
77: 殺することで我慢してやる」  
78: サスケ「いいや、お前にはもう何も出来ない。時間切れだよ、マリス姫。へへっ。封印が解けるそ  
79: の日まで仲良く頼むぜ？ マリス……」  
80:  
81: SE：ピキーン？  
82:  
83: ゼフィ「は、はは……。成功したよ。これでしばらく、穏やかな時が刻まれる……」  
84: シリア「ゼフィ、ゼフィ……。何でこんな」  
85: ゼフィ「そんなに哀しそうな顔をしないでよ。まだ、死んでいないよ？」  
86: 迷夢「うん、うん……。でも、ゼフィ。——これを持って」  
87: ゼフィ「ウロボロスの腕輪——。終わりのない、永遠、輪廻転生の象徴……。終わりは始まり」  
88: 迷夢「そうだよ。それがあれば、ゼフィは死んだりしないんだからね」  
89: ゼフィ「ありがとう、迷夢、でも、わたしはサスケがいなかったら、ダメなんだよ……」  
90: 迷夢「でも、サスケはまだ死んでない。絶対、死なせたりしないから。ね？ だから、死なないで  
91: よ。キミがこんなことくらいで死ぬはずがないんだから、ね？ キミは精霊なんですよ。精  
92: 霊なんだよ」

93: ゼフィ「迷夢の腕輪。ふふ……、ずっと欲しかったんだよ。どこで手に入れたのか知らないけど、  
94: キミ、妙に自慢げだったでしょう？ ふふふ……」  
95: 迷夢「それ、あげるから。だから、ね？」  
96:  
97: SE：ゼフィ、アミュレットのペンダントを外す音。  
98:  
99: ゼフィ「このペンダント、シリアに渡してくださいね」  
100: 迷夢「判ったよ。けど、あたしを一人にしないで、せっかく出来た友達だったの」  
101: ゼフィ「もうダメだよ。サスケがいなければ、わたしの身体は維持できない。特別なんだよ？ わ  
102: たしたち。サスケはわたしで、わたしはサスケなの。精霊核だけに依存してるんじゃないん  
103: よ……」  
104: 迷夢「もう、喋らなくていいよっ！」  
105: ゼフィ「最後まで、わがまを言わないで、聞いてくれてもいいのにね。迷夢？ ……あぁっ！  
106: ……ホントのことというね。わたしの精霊核はもうないの……」  
107: 迷夢「え……？ そんな、だって、そんなことあるはずない……。ゼフィが……、サスケがあんな  
108: 精霊狩りになんか負けるはずないっ！」  
109: ゼフィ「そのアミュレットに残った欠けらの記憶とサスケの魔力で今日まで頑張ってきたよ……。  
110: だから、言ったじゃない。わたしはサスケなんだって。マリスに傷を負わされなくて、  
111: 行く先は一緒だった。うぁっ！ あぐっっ」  
112:  
113: SE：手をぎゅ。  
114:  
115: ゼフィ「キミと会えて、楽しかったよ。……泣かないの、さよなら、めいむ……。シリアを……」  
116: 迷夢「ゼフィー！」  
117:  
118: SE：砂が崩れるような。そして、カラカラと腕輪が転がる。  
119:  
120: 迷夢「そんなの、ないよ」  
121: レルシア「……迷夢」  
122: シェイラル「行ってあげなさい、レルシアー」  
123: レルシア「うん……」  
124:  
125: SE：レルシアの足音。  
126:  
127: 迷夢「……レルシア……？ こんなはずじゃなかったのに。誰も犠牲にならないはずだったのに。  
128: どうして……。ゼフィは関係なかったのに、久須那もあんな呪いなんかかけられないはず  
129: だったのに」  
130: レルシア「過ぎてしまったことを嘆いても何も始まりませんよ」  
131: 迷夢「そう……。そうなんだけどさ……」  
132:  
133: SE：シリア、呆然とよるよる。  
134:  
135: シリア「……迷夢……？ ゼフィ、ゼフィは？ どうしたんだよ。何があったんだよ！ 父上  
136: は……。父上は……。……父上――」  
137: 迷夢「ごめんね、シリアくん。……何も出来なかった……」  
138: シリア「！ ……。……いいよ、もう、いいっ！」

139: 迷夢「……シリアくん」  
140:  
141: SE：シリアが去る足音。涙が散る。  
142:  
143: 迷夢「レルシア、あたし、行くね……」  
144: レルシア「え……。迷夢は戻らないんですか？」  
145: 久須那「迷夢……。いいのか……？」  
146: 迷夢「うん。いいんだ。……今はきっとダメだよ。あのコのあたしを見る目、見たでしょ？ あの  
147: 目……。久須那でもない、マリスでもない……。あたしを恨んでる。ま、判るんだけどな」  
148: 久須那「迷夢。お前はそれでいいのか？」  
149: 迷夢「いいわけじゃない。このままでいたんじゃ、迷夢の名が廃（すた）るってもんよ？ あの  
150: 様子じゃ誤解が解けるまで時間がかかりそうだし、それを黙って待っててもしょうがない  
151: し。ちょおっと、悪さしてよくなって♪」  
152: レルシア・久須那「え……？」  
153: 迷夢「あのね。ゼフィはもうダメだろうけど、サスケは必ず助けてみせる」  
154: 久須那「迷夢……」  
155: 迷夢「あはっ！ そんな切なそうな苦悩に満ちた顔して見ないでよ。二人とも。それじゃ、まるで  
156: あたしが負け戦に出向こうって感じじゃん？ 言うておくけど、あたしは勝算のない戦いに  
157: は赴かないのよ。何かをするには絶対に勝つ！ ……少なくとも、そのつもり……」  
158: 久須那「どうして急にそんなこと、思ったんだ」  
159: 迷夢「さぁあ？ ただ、何か、このままじゃいけない気がしてさ。けど、あたしはそんな真面目  
160: ちゃんじゃないよ。ま、いいしょ？ しんみりしちゃうの嫌いだから、……バイバイっ！」  
161: レルシア「バイバイってあの……」  
162:  
163: SE：迷夢、屋根の上からジャンプ  
164:  
165: □場面転換。シリアの背中。  
166: SE：シリア、ひたすら駆ける音。涙がキラキラ。  
167:  
168: シリア「ちくしょう、ちくしょうっ！ どうして、父上、ゼフィなんだよぉ」  
169:  
170: SE：何かにぶつかる。  
171:  
172: シリア「あうっ？ 痛い。誰だよ、こんな道の真ん中に突っ立てるのは？ ……おじさん？ どう  
173: してこんなところにいるの？」  
174: シェイラル「シリアくんを追い掛けてきました。……魔法を使ってね」  
175: シリア「魔法……」  
176: シェイラル「迷夢を……恨んでるんですか？」  
177: シリア「……」  
178: シェイラル「そうですか。……それでどうなります？」  
179:  
180: SE：シェイラル歩き出し、その後しばらくしてシリアが走る。  
181:  
182: シリア「待ってよ。おじさん……。……オレ、どうしたらいいんだろ……。どうして、オ  
183: レ……。あそこになかったんだろ……。？」  
184: シェイラル「（敢えて無視する）……さて、わたしたちにもやるがあります。……シリアく

185: ん。辛いでしょけど、今はダメです。——あとでゆっくりと……涙を流しましょう……。  
186: ……やはり、一度、マリスの封印のところへ戻らないとダメでしょうかね……」  
187: シリア「おじさん。オレ、迷夢を許せない……かもしれない」（眩ぎ  
188: シェイラル「……恨み言を言ってはいけません。——いいですか、シリアくん」  
189: シリア「だって、迷夢が、迷夢が。うわあああ～ん」  
190: シェイラル「……はあ。……困りましたね……。——シリアくんは……迷夢に何を期待していたん  
191: ですか？」  
192: シリア「……オレは……」  
193: シェイラル「シリアくんはゼフィのナイトとしての使命をお父上から受けていたんじゃないのです  
194: か？ 復習の女神、ヴェンデッタに魂を売ってはその身を憎悪に焦がすだけで、何も生み出  
195: しません。仮に……迷夢が悪かったのだとして、それでも悪かったのは迷夢だけだったのだ  
196: ですか？」  
197: シリア「……。ひぐっ。えっ、えっ……。だって、オレ、どうしていいか判らなかつたんだもん。  
198: ゼフィ……。だって、一番近くにいたの……迷夢だったんだよ。迷夢ならきっと……」  
199:  
200: SE：シェイラル、シリアを抱き締める音  
201:  
202: シェイラル「……おじさんの胸じゃ嫌かもしれないですけど、わたしにはこれくらいしかできませ  
203: んよ……」  
204: レルシア「お父さん」  
205: シェイラル「……？ どうかしましたか、レルシア？ あれ……？ 迷夢は……？」  
206: レルシア「子供みたいにいっぺんに聞かないで。迷夢は……わたしにこれを渡して、どこかに行っ  
207: ちゃいましたよ」  
208:  
209: SE：ペンダント、キラキラ。  
210:  
211: シェイラル「ペンダント型のアミュレットでしょうか？」  
212: シリア「それ、ゼフィの……」  
213: シェイラル「ゼフィの？」  
214: シリア「うん……。おじさんは知ってるよね。アミュレットの意味……」  
215: シェイラル「ええ……。シリアくん、あなたはそれのもう一つの意味が判りましたか？」  
216: シリア「……え」  
217: シェイラル「そうですか……。……ゼフィは迷夢を信頼していたと言うことですよ……。だから、  
218: それを迷夢に渡し、きっと、迷夢からシリアくんに渡してもらいたいと思ってたんじゃない  
219: でしょうか？」  
220: シリア「でもっ！ そしたら、どうして迷夢と一緒にいないんだよ。レルシアに渡して、オレのと  
221: ころに来なかったよ！ ……迷夢なんか、迷夢なんか大嫌いだよ」  
222:  
223: SE：近づく二つの足音。  
224:  
225: レルシア「……お父さん。シリアくんも大変だけど、久須那も大変なんです」  
226: シェイラル「久須那がどうしたのですか？」  
227: レルシア「……呪詛にやられてしまったようです」  
228: シェイラル「また、厄介なものを……。しかし、何故、こんなことを……？」  
229: 久須那「呪いをネタにわたしと話す機会を作りたかったみたいだ……」  
230: シェイラル「……今となってはそれも叶わぬ夢ですか……。あれは……。氷の封印はどうしまし

231: た？」  
232: レルシア「ご心配なく。手ばかりはありません。魔法でアルケミスタの近くにある洞窟に移動させ  
233: ておきました。あそこなら、簡単には見つけれないと思うし、万一のことがあっても人的  
234: な被害は最小限にとどめられると思うの」  
235: シェイラル「なら、長居は無用です。一度、我が家に帰りましょう」  
236: レルシア「歩いて？」  
237: シェイラル「歩いて帰るのには遠すぎますか。今の状況では……。この辺りは物理的に崩壊しかけ  
238: てますし、魔力的にも不安定になってきています。これ以上、魔法を使うのははばかれる  
239: のですが……」  
240: レルシア「背に腹は代えられないよ。それにお父さんなら、大丈夫」  
241: シェイラル「はあ……。その辺の根拠のない自信とはったりをかますところは玲於那に似たんで  
242: しょうね……。やっぱり」  
243:  
244: SE：魔法発動。  
245:  
246: □空間転移魔法で移動した先はレルシアの家。  
247: SE：ちょっぴり足音。  
248:  
249: シェイラル「この絵は……？」  
250: 久須那「……迷夢がレイヴンに頼んで描いてもらったんだ。こんな時、申（しん）がいてくれたら  
251: な……」  
252: シェイラル「申くんですか。東洋の退魔師。そうですね。彼なら、呪いを解くのも簡単に出来るで  
253: しょうね。わたしにマリスの呪いを解くことは出来ません。……しかし、久須那、わたした  
254: ちはあなたに流れる時を止めることは出来ます。——そこにある油絵のように……ね……。  
255: 誰か、呪いを解ける人が見つかるまで眠っているのが一番安全だと思います」  
256: 久須那「呪いの進行だけを遅らせる方法はないのですか……」  
257: シェイラル「ないですね。そんな便利なものがあつたらとくに試していますよ。——やはり“あ  
258: れ”をやるしかないと思うのですが……。レルシアはどう思いますか？」  
259: レルシア「……ドローイングですか？」  
260: シェイラル「ええ。それしかないと思います。幸いに大きなキャンパスもありますし、魔力的なこ  
261: とに折り合いが付けば条件はほぼ完全にそろっていますし」  
262: レルシア「でも、お父さん。それは禁術。知ってるでしょう。懲戒処分くらいでは済まないかも」  
263: シェイラル「しかし、一週間以内に呪詛を解ける呪術師、退魔師を見つけるのは難しいでしょう  
264: し……他にいい方法でもありますか」  
265: レルシア「……ないですね」  
266: シェイラル「では、ドローイングを実行しましょう。懲戒処分くらいなんですか。職より久須那が  
267: 生きてることの方が大事ですよ。——シリアくんも手伝ってください」  
268: シリア「え？ あ、はい。うん。——でも、何をしたらいいの？」  
269: シェイラル「ただ、久須那のことを思っていてくれたら十分です。あとはわたしとレルシアがやり  
270: ますから」  
271: 久須那「……しかし」  
272: シェイラル「静かにしていなさい。身体に障ります。マリスが一週間と言ったのはあなたが天使だ  
273: からです。この呪詛を喰らったら、人間なんかひとたまりもありません。……それに、久須  
274: 那はリテール協会の将来にとって必要な人です。ここで命を落としてもらっては困ります」  
275: 久須那「……そうですね。——しかし、どうしても言うなら、わたしはシルエットスキルを残し  
276: たい。将来、誰かがわたしの封印を解く時、それに相応しい人をこのシルエットスキルを

277: 使って探したい」  
278: シェイラル「……そんなことになる前にわたしがそれだけの実力を持った退魔師を見つけられたら  
279: いいのですが、それが出来なかったとして、未来に信用に足る人物が生き残ってるとは限り  
280: ませんしね……」  
281: 久須那「そんなことは考えたくないけど……。わたしが目覚める時はきっと、マリスも戻ってきて  
282: るはず。その時、共に戦える仲間が必要です。わたしだけではとてもマリスを止められな  
283: い」  
284: シェイラル「しかし、それはまだずっと先のことですよ。ゼフィとサスケの氷の封印がそう簡単に  
285: 破られるはずがありません。……百年、二百年も無事であってもらわないと」  
286: 久須那「でも、いつか必ず、解けてしまう」  
287: シェイラル「そうですね。――殺さない限り、マリスはまた同じことを望むでしょう、哀しいこと  
288: です」  
289: 久須那「その時にそうならないために、わたしはマリスを阻止する相棒が欲しいんだ」  
290: シェイラル「……久須那の気持ち、判りましたよ。将来、剣を交えるのはわたしではなく、あなた  
291: でしょうから、久須那のやり方で準備を整えるのが良いと思います」  
292: 久須那「ありがとう……。 (深呼吸) 光と炎の狭間に生まれし天の使い久須那の名において命ず  
293: る。我が思考を影として召喚せり。純粋なる光の思考、ファリス。我が意思に生命の息吹を  
294: 与え具現化し、実体なき精神の営みを化身と為せ。深紅の刃を翻す業火を司る異形のスト  
295: ス。その限らない赤き活力にてイグニスの青き魔力に火をともし。我が思いの全てを実体と  
296: 為し、我が前に示せっ！」  
297:  
298: SE：魔法発動。  
299:  
300: 久須那「シルエツトスキルっ！」  
301: 久須那(S)「……」  
302: 久須那「久須那……、目を開いて、わたしを見て」  
303: 久須那(S)「はい……」  
304: 久須那「……わたしが帰ってくるまで頼んだぞ……わたしがここに戻ってくるまで、お前がわたし  
305: だ。わたしの代わりに全てを見聞きし、覚えておいてくれ」  
306: 久須那(S)「判っている」  
307: 久須那「そうか、忘れていたよ。お前はわたしだったな。知らないことは何もない……」  
308: 久須那(S)「大丈夫、安心して。わたしがきちんとあなたの代わりに果たすから」  
309: シェイラル「オリジナルと寸分も違いませんね……。ここまで高レベルなものを創り上げるとは久  
310: 須那もわたしの知らない間に随分と腕を上げたんですね……。玲於那も喜んでますよ、きっ  
311: と」  
312: レルシア「そんな悠長なことを言ってる場合じゃないでしょう、お父さん？」  
313: シェイラル「そ、そうでしたね。少しでも呪詛の進行がいつていない方が後々有利でしょうから  
314: ね。では、覚悟はいいですか？」  
315: シリア「……どうして、これをマリスに使わなかったの……？」  
316: シェイラル「マリスを封じるには魔力が足りなすぎます。わたしはこの封印魔法を使えますが、シ  
317: リアくんの助けを借りてやっと完璧に出来るくらいです。しかも、マリスではなくて久須那  
318: をようやくですよ。サスケとゼフィは強大な力を持っていますが、この魔法を知らない。こ  
319: うなる他、なかったんです。残念ですが……」  
320: シリア「そうなんだ……」  
321: シェイラル「では、久須那。絵の前に立って、そっと絵に触れて……。ああ、生かきみたいですか  
322: ら、キャンパスの裏側でも構いませんよ。――シリアくんはわたしのところへ」

323:  
324: SE：足音等々。  
325:  
326: シェイラル「いいですか、これからわたしの言う言葉を心の中で繰り返してください」  
327: シリア「うん……。ねえ、久須那。また、会えるよね。きっと、いつか、また、会えるんだよ  
328: ね？」  
329: 久須那「きっと会えるよ。だから、そんなに淋しそうな顔をしないで」  
330: シリア「だって、ゼフィも父上もいなくなって、オレ、……オレ、一人でどうしたらいいのか判ら  
331: ないよ。この先、何をすればいいのか、判らないよ」  
332: レルシア「……久須那の封印を守りなさい。封印を解くその日が来るまで」  
333: シリア「オレが……久須那を守る……？ オレ、何も出来ないよ……」  
334: シェイラル「シリアくんが守らなければ守れる人はいないんです」  
335: シリア「オレしかいない……？」  
336: シェイラル「ええ、そうです。このメンバーの中で数百年を生き抜けるのはシリアくんしかいませ  
337: んし。何よりも、潜在的な魔力はあなたが最高なんです」  
338: シリア「……判ったよ、おじさん。……それが……今のオレに出来るたった一つのことだと思っ  
339: ら」  
340: シェイラル「ありがとう――。さて、始めますよ……」  
341: 久須那「ふふ……。この世界も悪くなかったな……」  
342: シェイラル「古の約束の地より、古の盟約に従い、我、シェイラルの名の下に汚れなく気高き魂の  
343: 主、久須那を画布に封ぜよ！ ……これでお別れです、久須那。思えば、あなたとはあまり  
344: 長くはないつきあいでしたね。しかし、そんな気はしませんでしたよ。玲於那の妹。そのこ  
345: とがわたしにそう思わせたんでしょうか……」  
346: 久須那「ふふ……。まさか、わたしがこうなるとは思ってなかったな……」  
347: レルシア「久須那……。また、会えたらいいですね」  
348: 久須那「そうだな――。シリア……？ お前はわたしに戻ってくるまで迷夢と仲直りしておくんだ  
349: ぞ」  
350: シリア「う……？ うん……」  
351: シェイラル「では、いつか、時の輪の接する奇跡が起きて、出会えることを願って。――封  
352: 印っ！」  
353:  
354: SE：ドローイング発動。  
355:  
356: シェイラル「さよなら、久須那。歴史の向こうで待っています」  
357: シリア「……綺麗……」  
358: シェイラル「それは綺麗ですよ……。この絵は言葉通りに"生きて"いますから。だから、この絵を  
359: 不純な動機で狙ってくるものも現れるでしょう。まあ、そんな輩に久須那のシルエツトスキ  
360: ルが破れるとも思いませんけど。真の意味で……やがて目覚めるマリスを討とうとするもの  
361: を選び出すのも、シリアくんの役目かもしれないですね」  
362: シリア「オレが……久須那を守る……」  
363: レルシア「そして、迷夢と仲直りです……」  
364: シリア「う……、うん……」  
365:  
366: □現在に戻って  
367: シリア「それでお仕舞いさ……。それからセレスと出会うまで、そうだな……かれこれ、千五百年  
368: くらいになるのか？」

369: デュレ 「……？ 千五百年ですか？」  
370: シリア 「あ、千三百年だな」  
371: デュレ 「どこか、変です……」  
372: セレス 「ねえ、リボンちゃん。マリスが再び天使の世界への入り口をこじ開けようとする前に久須  
373: 那の封印を解いて、助けてもらったらだめなのかな？」  
374: シリア 「ここで封印を解いたらダメなんだ」  
375: セレス 「どうしてさ！ マリスが目覚めたってのに、そんな——」  
376: シリア 「いいのか？ 久須那をここで呼び覚ますと因果律が崩壊するぞ」  
377: セレス 「小難しく言わないでよ。判らないから」  
378: シリア 「お前らをここにさせた原因がなくなるんだよ。久須那がここで蘇れば、オレはもう久須  
379: 那を絵の中に封印できない。あの禁術を使えるのはこの面子の中にはいないんだ」  
380: セレス 「シエラさんは？ レイアさんは？」  
381: シエラ 「申し訳ないけど、シリアの言うことは本当なのですよ……」  
382: セレス 「何でなのよ。肝心な時に！ じゃあ、何かい？ あたしはこの街が蹂躪されて滅んでい  
383: くのをただ黙って見てるしかないっての？」  
384: デュレ 「セレスっ！」  
385: パッシュ 「何だって？。もう一度言ってみる」  
386: セレス 「イヤ、だから、あの、その。デュレ、た、助けて……」  
387: デュレ 「……失言は放ちたる矢のごとく、取り返しはつきません。この責任、どう取ってくれるん  
388: でしょうね？ この後先考えない突っ走り娘は」  
389: セレス 「そ、それはあとでゆっくり聞いてあげるからさ。ね？」  
390: シリア 「この街は滅ぶのか。それはいつだ？」  
391: デュレ 「未来のあなたが言っていました。五月二十四日から二十五日の間だろうと」  
392: シリア 「また、随分とアバウトなことを言ったものだな、オレも……。この時代を生き抜いて、  
393: デュレたちのところにいるんだろう？ それなのに何故」  
394: デュレ 「……思い出したくないようなことがあったと言っていましたよ……」  
395: シリア 「まあ、あれは思い出したくないことの一つだな……」  
396: デュレ 「……リボンちゃん。あなたは今までわたしたちにウソを付いてきましたね？」  
397: シリア 「何だ？ 藪から棒に」  
398: デュレ 「ずっと気になっていたんです。本来のあなたなら絶対に知っているはずのないことを知っ  
399: てるんだから。今さっきも、初めて会った時も。どこか、違和感を感じていました。もう、  
400: 単刀直入に聞きます。……わたしたちはあなたとあなたの過去で会っていますよね？」  
401: シリア 「……セレスはどっちだと思う？」  
402: セレス 「はい？ え、何？」  
403: デュレ 「ホントのあなたは今、ここじゃないどこかにいるんじゃないんですか？」  
404: パッシュ 「どういうことだ？ ここにいるシリアはあたしの知ってるシリアじゃないのか？」  
405: シリア 「もちろん、パッシュの知ってるシリアだよ。それだけは間違いない」  
406: デュレ 「それは間違いないですけど、パッシュのリボンちゃんでないこともほぼ間違いないと思  
407: いますけど？ 違いますか、リボンちゃん。いい加減、白状なさい」  
408: セレス 「え？ なになに？ つまり、どういうこと？」  
409: デュレ 「つまり、このリボンちゃんはセレスのリボンちゃんだってコトです」  
410: セレス 「は？」  
411: シリア 「ちえ、ばれなと思ったんだけどな。（隠すのを諦めたかのように）そう、お前の思うよ  
412: うにオレはここのおれじゃない」  
413: セレス 「え～！ でも、それって何かおかしくない？」  
414: シリア 「いいや、おかしくない！ ……しかし、それじゃ、オレがここにいる説明になってない

415: な。お前の見た夢のメッセージはこれからオレたちが——送り出すはずのものだ。その中に  
416: オレがオレに宛てたメッセージがあったのさ。セレスにはデュレからのメッセージしか知ら  
417: ないだろうけど。セレスが夢を見るようになったのはオレと行動するようになってからだ  
418: る？」  
419: セレス 「う？ うん？」  
420: シリア 「それも夜、オレと一緒にいる時だけだ。ま、オレもそうだったけどな。最初は判らなかつ  
421: たよ。……細かいことは省くが、これだけはやっとなったよ。……ウィズが遺跡に来る前の  
422: 最後の晩に。オレがここに来るんだとね。しかし、迷夢もアルタも……誰も……パッシュで  
423: さえも気付かなかったのによく判ったな」  
424: デュレ 「なんか、この前、分かれた時とあまり雰囲気は違わないんです。二百二十四年ですよ？  
425: リボンちゃんくらいになったら見てくれは変わらないような短い時間でしょうけど、二百二  
426: 十四年前のリボンちゃんとこの間別れてきたばかりのリボンちゃんがこんなに似てるはず  
427: が……」  
428: シリア 「ないってかい？」  
429: デュレ 「そう言うことです」  
430: セレス 「ってことはキミはいつのリボンちゃん？」  
431: シリア 「十日後だ。ああ、だが、その間のことは今度こそ教えてやらん」  
432: パッシュ 「ちょっと待て、あたしたちをおいて、そっちで勝手に盛り上がらないでくれ。じゃあ、  
433: あたしのシリアくんはどこだ？」  
434: シリア 「エルフの森の……ここからずっと南に行った小さな森だよ。そこのジーゼと言うドライ  
435: アードのところにいる。ま、案ずるな。あいつは適当に元気だぞ」  
436: セレス 「じゃ、これはあたしのリボンちゃんなんだ」  
437:  
438: SE：セレス、シリアくんをぎゅ。  
439:  
440: シリア 「だから、お前はよせ、首が絞まる」  
441: パッシュ 「デュレ、あたしをエルフの森まで送ってくれ」  
442: デュレ 「あの、でも……」  
443: シリア 「……パッシュの思うようにさせたらいいさ……」  
444: デュレ 「はい……。フォワードスベル！」  
445:  
446: SE：フォワードスベル発動。  
447:  
448: セレス 「……愛されていたんだね、キミは」  
449: シリア 「ああ、これ程までではないくらいにね」  
450: セレス 「ってことは何？ あたしじゃあ、キミは満ち足りないというのか？」  
451:  
452: SE：セレス、しがみつく。  
453:  
454: シリア 「だから、やめ！ 誰もそんなことは一言も言っていないだろ」  
455: デュレ 「……どうして、本当のことを言ってくれなかったんですか？」  
456: シリア 「語ったとしたら、デュレやセレスに何か出来たのか……？」  
457: デュレ 「……そ、それは」  
458: シリア 「ふ……、ふははっ！」  
459: デュレ 「な？ 何かおかしいんですか、リボンちゃん？ わたしは何かおかしい事をいいまし  
460: た……？」

461: シリア「いいや。正直だなと思って。そんなお前を見てると何だか、ゼフィを見てみたいだね。  
462: 聞くな。根掘り葉掘り聞かれるのが嫌だからそう言ったんだ」  
463: デュレ「けど、気になります」  
464: セレス「ねえ、そんなのどうだっていいんだけどさ？ シェラやレイアやサムはキミのこと知って  
465: くの？」  
466: サム「知らねえな」  
467: シェラ「知りませんでした」  
468: レイア「知りません」  
469: セレス「……詐欺師、ペテン師っ！」  
470: シリア「……うるさいぞ、お前。ここ二日くらいでちょっとはお利口になったかと思ったが」  
471: デュレ「なるわけないでしょう？ これがっ！」  
472:  
473: SE：ごちん。  
474:  
475: セレス「ぎゃんっ！ ちょっと、酷い、デュレ！ これ以上頭が悪くなったら困る！」  
476: デュレ「それ以上悪くなることなんか、絶対ないから、安心しなさいっ！」  
477: シリア「オレが噛みつかないうちに大人しくしておけよ？」  
478: シェラ「そう言うシリアも二百年経っても変わらないですよ？ 気持ちよさそうな場所を見つけ  
479: たら、すぐに丸くなるよ。人の頭を遠慮なく踏ん付けるところとか。……二百年経って  
480: もシリアくんはシリアくんなんですよ」  
481: シリア「……ぬぐっ」  
482: レイア「シェラさん、騙されていたんですよ？」  
483: シェラ「今でも先でもどっちもシリアくんはシリアくんでしょう？」  
484: シリア「鶏が先か卵が先かってのは知ってるだろ？ ちょうどそんなようなもんだ。呼ばれたのが  
485: 先なのか、知っていたのが先なのか判らないのさ。ただおぼろげな記憶の向こうに何かにエ  
486: ルフの森に連れて行かれた覚えがあるんだ」  
487: デュレ「その誰かはリボンちゃん自身だったんですね？」  
488: シリア「そうらしい。と言うか、オレが心許ない記憶を頼りにそうしたからそうなんだろうな？  
489: だが、これだけははっきりと覚えているし、言うことが出来る。……なあ、レイア？ オレ  
490: がここにいて一番驚いたのはお前だろ？」  
491: レイア「——どういう意味ですか？ わたしにはさっぱり……」  
492: シリア「とぼけるなよ。このオレをステージアウトさせたのはお前だろ。それだけじゃあない。  
493: シェラだってそうだ。知っていたはずなのにどうしてレイアをそばに置いていた？」  
494: セレス「あ、あの～、あたし、訳判んないんだけど、どうしたらいい？」  
495: デュレ「セレスは黙ってなさい。まさか、あなたはレイヴンやマリスと……？」  
496: レイア「シリアの言うことを真に受けなくて。あたしは何もしていません」  
497: シリア「いいや。オレは知ってる。お前はシェイラル一族の全てを手に入れようとしていた。一族  
498: の血筋を受け継ぐものを消すように、あれこれ策略を巡らせていたのはずだ。何故なら、お  
499: 前には手に……」  
500: レイア「それ以上、侮辱すると許しませんよ」  
501: シリア「侮辱？ はっ！ 敬意を表してるのさ。フツーはできねえよな。オレの口から説明してい  
502: いかないか？ それとも、自分で説明するか？ しかし、ま、シェラを筆頭にそろいもそろっ  
503: てみんな、お人好しだよ」  
504: セレス「もちろん、“リボンちゃんも含む”なんですよ」  
505:  
506: SE：セレス、シリアの頭をポンポン

507:  
508: レイア「……説明なんかいらないでしょう？ あなたには。判ってるくせに。わたしを殺す気です  
509: か？」  
510: シリア「何で？ はっ！ そもそも死んだくらいじゃその罪は償えない。それに……今となっ  
511: ちゃ、お前に死なれちゃ困るんだ」  
512: レイア「——偽善者め」  
513: シリア「偽善者、結構。何者にもなりきれない、中途半端な存在よりはずっとましだと思うけど  
514: ね？」  
515: レイア「ちっ」  
516:  
517: SE：ガシャアアン。窓を割る。  
518:  
519: セレス「待ってっ！」  
520: サム「待て、お前は行くな。俺が行く」  
521: デュレ「わたしたちをレイヴンから守ってくれたはずなのに、何故？」  
522: シリア「——まずはそこから疑ってかかるのがいいのかもしれない」  
523: セレス「……レイアが敵でも味方でも、そんなのどうだっていいよ。あたしが知りたいのはそんな  
524: ことより、この先どうなるの？ キミはやっぱり、全部知ってるんですよ。あたしたちが  
525: ジーゼのところからここに来た、その後のことも。今この後のことも」  
526: シリア「知ってはいるよ。——歴史は変わらない。それだけははっきり判るんだ。予定調和に向け  
527: て、全てが紡がれている。多少の誤差があろうとも、大きなイレギュラーは起きえない。そ  
528: うしたら、判るだろう？ この時はお前のいたシメオンにまでつながるんだ」  
529: デュレ「……何故、そんな根拠のないことを自信満々に言えるんですか？ こは“わたしたちに  
530: とって未来”そう言ったのはあなたですよ？」  
531: シリア「未来は未来さ。疑う余地はない。お前たちの行動次第で幾つもの道筋はできあがるが、行  
532: き着く先は同じなのさ。時の流れというものはその改竄を決して許さない。そう言うもの  
533: だ」  
534: デュレ「しかし、それではあまりに未来が……哀しすぎます……」  
535: シリア「哀しいか？ オレにはそうは思えない。希望に満ちあふれてるとまでは言わんさ。けど  
536: な、決して暗いものではない」  
537: デュレ「しかし、わたしに薄明かりか、闇の中で……」  
538: シリア「その闇はいつか、必ず明ける……」  
539: デュレ「明けない夜がないように……ですか？」  
540: シリア「そう言う事だ……」  
541:  
542: SE：突如、ドアが開く  
543:  
544: 迷夢「やっほ～。みんな、元気してたあ？」  
545: セレス「うわあ、何、何？」  
546: デュレ「ぎゃっ」  
547: シリア「……？ 迷夢か。どうした？」  
548: 迷夢「あれ？ ひい、ふう、みい……三人足りないね？」  
549: セレス「うわっ！ また、来たっ」  
550: 迷夢「嫌ねえ、あたしのこと、悪魔か魔物だと思ってるでしょ？ エルフの子猫ちゃん、その二」  
551: デュレ「何しに来たんですか？」  
552: 迷夢「うん？ 何しに来たんだっけ？」

553: セレス 「……本気で忘れてるみたいだよ」  
554: 迷夢 「あはっ♪ けど、敵になりに来たんじゃないし、さっきみたいな悪さはしないから」  
555: セレス 「ホント？ 何か、いまいち信用できないのよね、キミは」  
556: 迷夢 「別に信用して欲しい訳じゃないからいいよ。そんなの。ただ……、あたしに味方をしてあげ  
557: ば良かったって、後悔することになるよ」  
558: セレス 「しない」  
559: 迷夢 「あらぁ。おねえさまの言うことがきけないなんてダメな娘ね？」  
560: セレス 「ねえ、リボンちゃん。こいつ、どうにかなんないの？」  
561: シリア 「昔から、そう言う奴だ。どうにもならんし、どうにかなるならとっくにどうにかして  
562: る。——しかし、……さっきは訊くのを忘れたが、あれでよく死なずに戻って来れたな」  
563: 迷夢 「いやぁね、レイヴンに斬られた時はもうダメだと思ったんだけど、案外、あたしってしぶと  
564: いらしくて死ねなかったのよね。まあ、死ぬ気なんかさらさら無いんだけどさぁあ？ 聞き  
565: たい？ 聞きたい？ どうやって、あたしが奇跡の生還を遂げたのか、知りたくない？」  
566: シリア 「あとでいいよ。まだ、あとにでも聞いている時間はあるだろうさ」  
567: 迷夢 「ちえっ、つまらないなぁ〜。時間はたっぷり……、なんて言うつもりはないんだけどさぁ  
568: あ？ ま、折角だからと思って、みんなのところに文字通り舞い戻ってきたのに、こんなに  
569: 冷たくあしらわれちゃってさぁあ？ 深く傷ついちゃうわ。あたし」  
570: シリア 「なぁ、その間延びしたような口癖は何とかならないのか」  
571: 迷夢 「う〜ん、ならないねえ。これがあたしのステータスだって言ったじゃん？ けど、これで、  
572: マリス姫には負けないよ。あたしがいれば百人力！」  
573: シリア 「……マイナス百人力の間違いだろ？」  
574: 迷夢 「ほお〜♪ そこまで言っちゃいますか？ キミはぁ。この迷夢の恐ろしさを忘れちゃったの  
575: かなぁ〜あ。……くすぐっちゃうぞっ！」  
576:  
577: SE: 迷夢、シリアをくすぐる音。  
578:  
579: シリア 「やめ、やめろって！ どうしてお前は昔からそうなんだ。あんな死にそうな目に遭って  
580: いてどうして変わらない？ お前には学習機能は付いていないのか？」  
581: 迷夢 「う〜ん。そんなの付いててもどうでも、関係ないじゃん。この際？」  
582: シェラ 「敵にはならないんですか？」  
583: 迷夢 「シェラ・ホルスト。シェイラル一族の末裔、最後の生き残り」（まじめに  
584: シェラ 「ええ、そうです。迷夢さん」  
585:  
586: SE: 迷夢歩く。  
587:  
588: 迷夢 「大丈夫。仲間に入れてくれたら、あたしは絶対に裏切らない。その代わり、あたしの目的に  
589: 手を貸して。それが何なのかは今のキミたちならきっと判るはず……」  
590: セレス 「ウソつき」  
591: 迷夢 「ウソつきい〜い？ その二のくせに態度でかいね」  
592: セレス 「その二のくせになって、キミこそ一体何だか、訳が判らないくせに」  
593: 迷夢 「シャットアップ！ このあたしとリボンちゃんの麗しの関係の知らない知った風な口をきか  
594: ないでもらえるかしら。って、リボンちゃん？」  
595: シリア 「迷夢はリボンと呼ぶなって言っただろ。背筋に悪寒が走る。……誰か、こいつを止めてく  
596: れ」  
597: セレス 「無理だと思っただけだなあ。だって、迷夢ってば、ここにいる誰よりも濃い性格をしてい  
598: るし」

599:  
600: SE: ゴーンゴーン、ゴーン……。三点鐘。  
601:  
602: シリア 「もうすぐ夜が明けるか……。しかし、少しでも仮眠を取っておこう。パッシュは……いな  
603: いしな。あいてるベッドでも寝具でも好きなものを引っ張り出してきて寝る。堅いのが好き  
604: なら床でもいいぞ。ともかく、休め。——これからの数日はきつとどんな一日よりも長く感  
605: じる。……迷夢。お前も休んでいけ……。敵じゃあ、ないんだろ？」（にやり